

十五夜の歌

—餅と芋の昔話—

小林 幸夫

(一) 「和尚と小僧」譚

とありしに、師の坊、
雲にかくれてこればかりなり

かつて私は『醒睡笑』の魅力について、つぎのように述べたことがある。この近世初期の咄本は、中世説話の世界に開かれていると。もちろん、そのとおりなのだが、ひるがえって、それはまた、民間説話、昔話の世界へとつながっている。そこにこのテキストの尽きせぬ魅力はある。過去にもいささか論じてきたが、それらはむしろ、近世初期の咄・雑談の世界を明めることに、力点はおかれていた。ここでは昔話を比較の視野に入れて、笑話の伝承について論じてみよう。

たとえば『醒睡笑』(児の嘲・巻之六)につぎのような連歌がある。

貧々たる坊主の、眠藏より餅の半分あるをもちて児にさし出す。受取りさまに、

十五夜のかたわれ月はいまだ見ぬ

知話、さかしい一休像が浮かびあがつてくる。これも「和尚と

小僧」譚であり、さきの笑話に類するものであろう。

いうて、和尚さん言うたん。
「雲に隠れてここに半分」

(二) 餅連歌

こうした「和尚と小僧」の話は、民間の昔話「餅連歌」として記録さてもいる。全国的な分布をみる話で、例をあげればきりはないが、ここには『美作の昔話』から「十五夜の餅」を示してみよう。^②

塩の辛い（抜け目がない）小僧がおって、和尚さんが法事があるというて近所へ行て、小僧がひとり留守うしょうたら、隣から「餅う和尚さんにあげてくれえ」というて、持つて来てくれたんじや。そがあしたら、どうもその餅がおいしそうげな餅やで、食べとうてこたえんようになつて、せえから、和尚さんが出た間に、砂糖出あて、付けて食ようた。そがあして食ようるところへ、ガラガラいうて表がいうたで、こいつ和尚が戻つた思つて、じきに食いさしの半分をふところへ入れて、半分だけ置いておつたら、和尚さんがはあてきて、「小僧、いま戻つた」「どうもご苦労さんでした」というて、「隣から和尚さんにあげてくれえ」というて、お餅うもろつたんですけえ」というて半分出あた。そがあしたら、和尚さん、見ようたら、

「十五夜の月はまんまるなるものを」

いうて、ふところから自分の食いさしの餅う和尚さんに出あたもんじゃけえ、「頼智のええ歌を言うたけえ、お前に褒美に、その餅あみなやるで食ええ」。その坊さん、あきらめのええ坊さんで、小僧にみなやつて食わしてしもうた。そがあな話うしようた。

はるか時代を隔てて、この話はさきの『醒睡笑』までさかの昔話では、小僧の抜け目のなさは、歌によつて表現され、いつも強調されている。滋賀県愛知川町に伝わる「餅連歌」の話でも（『近江の昔話』^③）、「小僧がちよつと賢いのかしら」と語つて、「雲に隠れてここに半分」の歌が、小僧のはしさをあらわす。美作であれ近江であれ、小僧の知恵は、歌によつてあらわれる。どういう人々がこの話を持ち歩いたか、具体的にはわからない。しかし、話の性格は、およそ見当がつく。おそらくは、餅を食うべき日、「餅の日」に取材した話であつたろう。

沖縄県国頭郡大宜味村に伝わる昔話「十五夜の餅」が、「餅の日」の話を考えるうえで参考になる。これも美作の話と同じ「餅連歌」である。十五夜拂みのとき、餅が足りないので半分に切つてくばると、一人が「十五夜の月やかたひらるうがまりる」と歌う。餅を配つた人が気づいて、半分の上に丸い餅を重ねると、今度は「雲に隠りやに、なまるうがまりる」と歌つた。

八月十五夜のことを「デューゲヤー」といい、その夜の行事は、

多くの部落すでに廃れているというが、「デューゲヤサマウ

ガミ」（十五夜様拝み）と称した。小野津部落で行われている同行事が、『喜界島年中行事』に詳しく報告されている。十五

夜拝みの詳しい解説は別の機会に譲るとして、農作神たるお月

様はもちろん、先祖の靈にも豊作を祈る行事と考えてよからう。⁽⁴⁾

月に唐芋を供えるのは、国頭郡大宜味村の「餅」と同じく神饌である。この夜、宴の座につどう人々が、酒食とともにしな

がら、名月の話題に興じたのである。「十五夜の餅」の昔話が、歌に興じる十五夜拝みの宴の印象を伝えているよう思う。

このことから推察すれば、「餅連歌」の昔話は、「餅の日」、こ

とに八月十五夜を舞台とした昔話であった。一句の応酬、連歌咄の形式のうちに、その跡をわずかにとどめている。

・あるお寺で檀家からふくで餅（正月の鏡餅）上げられだ

んだとしや。（『陸前のお昔話』⁽⁵⁾

・お寺へなあ、お鏡持つて行くんじやな。（『丹波和知のお昔話』⁽⁶⁾

もちろんこれら語りは、鏡餅というばかりで、八月十五日と言つてはいない。しかし、法事にしても（『近江のお昔話』）、正月にしても、餅は「ハレの日」のご馳走であった。その餅を話題とした連歌の遊びのうちに、かつての「餅の日」、八月十五夜の印象は刻まれているのである。

(II) 「餅の日」の話

太田南畠『平日閑話』（巻二十二）の「西行片破れ月の歌」も「餅の日」の印象を今に伝えている。

西行行脚の時、頃しも八月十五夜彼岸の節、山里の人家に托鉢を乞ひ玉ふ。主の女父の祥月なれば下女に申付て大きな餅一つ与へさせしに、此女二つに割て西行の衣鉢に入れけり。西行取あへず、

十五夜に片はれ月はなきものを

と口ずさみければ、女微笑みて餅を片々取出し下の句、

雲にかくれてこゝにこそあれ

「八月十五夜彼岸の節」となつていて、「ハレ」の日の話であることが、はつきりと語られている。ことに八月十五夜、月見の夜には、江戸・大坂とともに、団子を供えた。京・大坂では、それを小芋の形にしたという（『守貞漫稿』）。餅の日が舞台であればこそ、西行と女の餅問答は、いきてはたらく。「十五夜一餅一満月一雲一片割れ」、こうして餅の縁に遊んでいるのだ。月に餅を供えた、宴の席の連歌咄としては、いかにも時宜を得た話題となろう。八月十五夜、「餅の日」には、一句の応酬に興ずる歌の話題こそふさわしかつたのである。

この西行の話は、昔話としても民間に伝えられている。「西行様の旅」と題されるもの。これも西行と女の問答である（『伊那の昔ばなし』⁽⁷⁾）。

むかし西行様が旅僧になつて方々旅をして歩いた。だんだん行くと向こうの方に大きな家があつたもんで、西行様は

其処へ行つて、戸間口へ立つてお経を読んで居つた。丁度その家では其の時お焼きを焼いて食べて居る所だつた。みると穢い坊様が立つて居るので、その家のお神さんはあんな坊様にお焼き一つやるのは勿体ないと、そつと半分こわつて懷の中へ入れて、残りの半分だけ持つて行つて坊様にやつた。そうすると西行様は其の半分のお焼きを貰つて

もち月に片われ月はなきものを

と歌によんだ。すると其のお神さんが

雲にかくれて此所に半分

と云つて、懷の中から残りの半分を出して西行様にやつた。ところがこの話には、八月十五夜とも、彼岸とも、時はさだめられていない。おそらく餅の日の話であることが、忘れ去られた結果にちがいない。忘れられたとはい、何よりも連歌の付合い、「もち月一餅一片割れ一雲」という遊びのうちに、八月十五夜の印象は、とどめられている。かつてはこの夜、歌の話題に興じたのである。それについては後述する。

(四) 芋盗みの歌

「餅連歌」の昔話ばかりではない。ここにもうひとつ、十五夜の歌がある。それとくらべれば、「餅の日」の話の性格が、いつ

そう明らかになる。やはり『醒睡笑』から例をひとつあげよう(卷之五・姫心)。

夢庵は、常に牛に乗りて遊行ありし。月しらけて興ある夜、野に出らるるに、牛芋畠へひきゆく。畠主腹立しわめきければ、「こちらへよ、歌を詠みてそのことわりを聞かせん」とて、

月も見ずいもが子どもの寝入りたを起こしにきたは如何あるべき

夢庵、すなはち牡丹花肖柏の歌。畠主にとがめられて、「いや、こんな美しい晩に、月も見ず寝入つてしまつた子どもを、起こしきたのだ。どこが悪い」と、抗弁してみせたのである。もちろん、芋畠の「小芋一(掘り)おこす」に、「子ども一起こす」「根入る」に「寝入る」がかよわせてある。なぜ芋が歌われるのか。十五夜の名月には、芋が供えられる。「芋一名月」と『類船集』にもあるように、この狂歌も芋と名月の取り合せに遊んでいる。歌におぼえのある者ならば、この一首が、芋名月の夜を詠うこととは、おのずと理解できたであろう。

『かさぬ草紙』の一話は、右の類話であるが、いつそつはつきりと芋名月の夜を話題とする。

むかしとほしき公家あり。八月十五夜はかならず芋を月に奉るものなれば、人えさせなば力なし。近きあたりの前裁の主と芋あるを見つけて、からうじて盗みてけり。前裁の主とがめければ、

月もみでいもが子どもの寝入りしをおこすに何かとがはあるべき
となん詠みければ、あるじゆるしてけり。

肖柏と貧乏公家を入れかわつただけで、歌に大きな変化はない。「八月十五夜」、月に芋を奉る「芋名月」の民俗を背景とする話である。この日の民俗については、花部英雄氏の詳しい論があるの、ここでは触れない。⁽⁸⁾ 芋盗みをとがめられて、貧乏公家が歌をものするように、この日は、詩歌に時をすごした。『日次紀事』（八月十五日条）は、つぎのように説明する。

今夜地下ノ良賤モ亦名月ヲ賞ス。各々芋ヲ煮テ之ヲ食フ。

故ニ俗ニ芋名月ト称ス。他邦ニ於テ生莢豆湯ニテ煮、之ヲ

食フ。九月十三夜ハ芋ヲ食フ、是皆ナ節物也。然ルニ京師

ニ於テハ互ニ之ヲ誤ルモノカ。終夜月ヲ見、意ニ隨テ興ヲ

催ス。大井川或ハ淀川或ハ近江ノ湖水各々遊観ス。東坡ガ曰、

嘗テ聞ク此宵ノ月万里陰晴ヲ同スト云。果シテ然リヤ否ヤ。

この夜は芋を煮て食い、各々、川や湖水に船をうかべて観月の宴をもよおす。それは月を賞でて、詩歌に遊ぶ時でもあつた。

名月を肴にして、宴の夜は更けていく。そんな遊びの宴の座を『隔萬記』は記録する（寛文元年八月十五日）。八月十五日、この夜は和漢俳諧に興じ、発句は鳳林承章、漢句は後水尾法皇である。

この日は、修学院離宮の池の新造があり、宴もだけなわ、初雁を肴に月を賞である。月を話題に聯句をものし、宴の肴が俳諧のタネとなれば、月に供える芋も、歌の話題となるだろう。ならば『かさぬ草紙』の狂歌も、作者不詳ではあるが、もとをだせば、宴の座の遊びであろう。芋名月のこの夜、芋盗みの民俗を背景として作られた狂歌が、「月もみでいもが子どもの寝入りしを」の一首であろう。詩歌に遊ぶ夜であれば、歌は、この夜の格好の話題、いわば宴の肴となろう。『かさぬ草紙』のように貧乏公家が、芋盗みをとがめられて、歌によつて罪を許される。こんな歌話に興じながら、「歌の徳」をたたえたのである。

（五）当座の俳諧

元禄期に編まれた『和歌威徳物語』は、さまざま古來の説話をあつめて、歌の徳をあらためて称揚する。そこから「十五夜の歌」を示してみよう。「歌の徳にて神明空を晴らし給ふ事」に分類される鴨長明の逸事である。

鴨の長明ときこうえしは、無二の道心者にて、又和歌の道、いとめてたかりき。八月十五夜に雨あり月くもれば、一人凶なるとて、王城の地主賀茂大明神に祈祷ありて、歌をよみ法楽すれば、其の歌のほまれによりて、空晴れ、月清らかなり、といへり。あるとし八月十五夜に、月くもりて明らかならざりければ、鴨の神主長明が歌に、

名月ヲ千世ノ秋マテミ池哉

宴肴初雁闌

吹きはらへわがかも山の峯の嵐こはなをざりの秋の空か
は
かりきと。

狂歌に笑いながら、「歌の徳」をたたえること、それが芋名月の宴の座の遊びであつた。

此の歌よむとひとしく、空晴れ、千里の外までもくもりな

この説話は、『三国伝記』（巻第五）を出典とする。長明の徳

はもちろん、彼の歌に感應して、雲をはらつた賀茂大明神の神徳をもたたえる。法樂、すなはち神をたのしませる「歌の徳」を言い立ててているのである。

同じく「十五夜の歌」であるにしても、このありがたい長明の歌にくらべれば、先の芋盗みの歌は、即興の狂歌にすぎない。貧乏公家の言い逃れにひとしい。とはいゝ、それでもこの歌が巧みなのは、芋名月の夜にふさわしく、「芋」と「名月」を取り合わせたところにある。八月十五夜、「芋名月」を話題にして、「芋盗み」に「妹盗み」をかよわせたこと。それがこの狂歌の俳諧性である。これは、さきの「餅連歌」の話、「望月」に「餅月」

西行の芋盗み説話は、『詩学大成抄』（米沢興讓館・時令門五）にもある。やはり西行が例の歌によつて、罪を許される。これも歌徳説話である。ただし歌に異同がある。

芋ニモ子母ト云事アリ。芋ニモラヤニチサイイ子イクツモト
リツイテアルソ。ゾヽリコト云ソ。西行法師ノ八月十五日
夜名月ニ芋ワハタケエヌスミニイカレタレハ芋マフリガミ
ツケテラエシバツタソ。ユルセト云テ歌ヲヨウタレハ
ユルイタゾ。歌ニ
月ミヨトイモガフシドノソヽリコヲコシニキタハ何カ
クルシキ

を取り合させた遊びにひとしい。いずれも八月十五夜、名月に供えられた「餅」や「芋」を話題にした、即興の歌・連歌の遊びから生まれた話にちがいない。歌・連歌の遊びであれば、肖柏の逸話に付会されるのも不思議はない。それも「当座の俳諧」であった。

長明の法樂の歌を「聖」とすれば、餅・芋の歌は「俗」である。しかし、卑俗であるにしても、その歌によつて窮地を逃れるおかしさに、腹をかかえたのであろう。「俗」とはいゝ、滑稽な

「ぞぞりこ」とは、親芋にたくさんついている小芋のこと。「芋がふしど」は、「妹が臥し所」にかよう。この芋盗みの歌、西行が女房の所に通つ「夜這い」の歌と解釈されている。⁽⁹⁾歌の意

味は、「酔笑」や「かぬ草紙」と変わらない。ただ「ぞぞりこ」という俗語が生きてはたらく。ここに『詩学大成抄』の西行説話のおもしろさがある。以下、少し「ぞぞりこ」の注釈をしておこう。

天正狂言本に「いもあらひ」の一曲があり、ここに「ぞぞりこ」の歌謡が記されている。

大名出て太郎冠者を呼び出す。不奉公と言ふて叱る。此程

上洛したと言ふ 名所旧跡詠れと言ふ 清水へ参 又四条
の道場へ参、踊見て、賀茂川の側で芋洗ふ。芋よ／＼、
どの子が愛ふし、＼＼、雨土くれに、はたかるゝ、側子（ぞ
ぞりこ）が愛うし、＼＼。 真ん中におりやれ＼＼、十五
夜の月の輪の如く、＼＼。おれが殿ごは都におりやる、＼＼、
由無い事はせぬ物じや、＼＼。後皆水かける。中に百年の
姥の水に失（む）せる。とめ。
「芋よ芋よ」の歌について、志田延義氏は「盆踊りの歌」と
解釈して、つぎのように述べている。¹⁰

要するに、「太郎冠者が盆踊（風流踊）の様子を歌い、あるいは仕方で演じて見せた」のであり、「芋よく」、「真ん丸に」、「おれが殿御」と、三つ歌いつづけたのである。舞台で太郎冠者が歌うとしても、「側子（ぞぞりこ）が愛うし」「おれが殿ごは都におりやる」などと歌われると、芋洗う女の、男を誘うような姿態が連想されて、これは、きわめて工口チックな詞章となる。

「こういう説話を背景に置いてみると——いもかぶしとのそそりこを」という西行の歌は、いつそう好色な色合いを帯びてくる。女の寝所へ忍んでいった西行が、見咎められて、言い逃れをする。「月見せたさに、子どもを起こしに来ただけですよ」とはいつても、相手が、他人の女房であれば、女を寝盗ろうとする「妹盗み」話となるのである。「ぞぞりこ」という言葉が、そういう連想を喚起するのである。その点が、「醒睡笑」や「かさぬ草紙」の歌と異なるところである。「芋盗み」が「妹盗み」に転じるのは同じでも、「ぞぞりこ」という言葉が、好色なイメージを喚起している。ともに歌によって難を逃れる歌徳説話をあるにしても、『詩学大成抄』の西行説話は、いつそう卑俗で好色な話となつていて。それは酒食に興じる、芋名月の宴の、遊興的な雰囲気を映しているよう思われる。開放的になつて、宴が少し放埒にながれれば、おのずから咄も艶笑的に傾くのである。

この「芋よ芋よ」の諸歌は、盆踊りの組み歌であつたと考へていいのではないか。「真ん丸に」などといふのも、踊りの輪を比定しての表現のやうに想はれる。ついでに、狂言としては、太郎冠者が、四条道場踊りを普通の踊りのやうに思ひ違ひをして、この「芋洗ふ」踊りを見たと言ひ、踊りの輪の中に「百斗りの姥」が交じつてゐたといふものと解すると面白いやうに思ふ。

(七) 芋盗みの昔話

これに対しても、昔話の場合、歌の修辞の知識など必要ない。
ここに「芋盗み」の昔話をあげてみる。

『醒睡笑』や『かさぬ草紙』、あるいは『詩学大成抄』の歌には、「芋盗み」に「妹盗み」をかよわせるほか、さまざま修辞の工夫があった。それは、作者や享受者が、歌の教養を有していることを意味する。乾裕幸氏は、「狂歌が内裏で盛行したことは歴史的事実である」と述べながら、「狂歌作者の社会的ヒエラルキーが、歴史的にみてきわめて高位にあつた」ことを指摘している^[1]。このような狂歌の作者層(享受者層)を念頭においてはな

る。これもまた「芋盗み」の歌である。

芋を盗まれたる人のよめる
筒井筒五ばかりもとりはせで掘りにけるかな芋見ざる
かやうにうちながめてゐける所へ、又とりに来りけるを、
捕へて縛めければ、盜人
月見よと芋が子どもの寝入りたを起しにきたは何かくる
しき

ここにも「妹盗み」がかよわせてある。当然、この狂歌問答は、『伊勢物語』(第二十二段)を典拠とする遊びである。この物語が「男と女の物語」(『伊勢物語闇疑抄』)なればこそ、「妹盗み」から「芋盗み」への転換は、卑俗な笑いを誘う。それを理解する歌の教養がもとめられているといえる。

(1) 「狂歌の手柄」岐阜県揖斐郡

(2) 「芋名月のいわれ」鳥取県西伯郡

このほかにも、香川県には「西行芋盗み説話」がいくつか紹介されている^[2]。これらの昔話に共通するのは、歌の修辞に関心はない、ということ。ここに香川県善通寺市・七仏寺の昔話を示してみる^[3]。

西行はこの土地までやつてきたのだが、八月の十五夜に月があまり美しいので、芋畑へ出て、月を眺めていた。ところが付近の百姓がこれはてつきり芋盗人にちがいない思つて、わが芋畑で何をするぞとがめると、西行は今夜は芋名月の晩だから芋を一つくだされといつた。すると百姓は歌を一つ詠んでくだされば差し上げようという。西行は、月見よと芋の子どもの寝入りしを起こしに来たか何か苦しき

という歌を詠んだ。何かわけのわからぬ歌だが、百姓は喜んで、西行に芋を与えたという。この歌が七仏寺の前に刻まれて建つてあるのである。

語り手が「何かわけのわからぬ歌だが」と言うように、意味さえ判然とつかめていない。西行が「歌の手柄」によって許される歌徳説話ではあるが、しかし、歌の修辞などに关心は払われない。

もちろん「妹盗み」のことなど理解の外にある。むしろ、話者の関心はこの話の事実性にあるようだ。「この歌が七仏寺の前に刻まれて建つてある」という語りに、それはあらわれている。その意味では、この昔話は、「伝説に近づいているのだ。

鳥取県西伯郡の昔話でも、この傾向は変わらない。¹⁴⁾ 八月十五

夜の芋名月に、和尚さんに言われて、小僧は里芋を盗みに行く。ところがそれを咎めた百姓は、和尚のところへ、ねじ込んでさ

た。そこで和尚が詠んだのが、例の「芋盗み」の歌である。和尚の歌に感心した百姓は、これからはなんば芋掘つてもかまわんから、「芋をお月さんに供えてくれ」と許した。それがはじめて「月見の晩に里芋を供える習慣がついたんだって」と結ばれる。なるほどこの話も歌徳説話である。しかし、こちらも歌の修辞のことなど念頭にない。「妹盗み」のことなど思いも及ばない。それよりも、八月十五夜に、月に芋を供える習俗、その始まりを語るところに、この話の関心はある。つまり、芋名月の晩の、民俗習慣の説明に傾いてしまっているのである。

もちろん歌の修辞にまったく関心がないわけではない。たとえば岐阜県揖斐郡の昔話では、芋盗みをはたらくのは一休さんである。「なるかわ村」で盗みを咎められて彼は、

子をだいて寝ている芋に月見じやと起こしてみたに罪にな
るかわ

と詠んで、難をまぬかれる。ここには「妹盗み」を連想させる氣味がないわけではない。しかし、それよりも歌の興味は、「な

るかわ」の地名に「(罪に)なるかわ」をかよわせた、一休の頓知と「くすぐり」にあるのだろう。近世初期の狂歌咄が伝え聞いたおかしみ、「芋盗み」に「妹盗み」をかよわせた機知と好色的な笑いは、すっかり後退している。

(八) 芋の一生の物語

「餅連歌」(十五夜の餅)や「芋盗み」の昔話が、八月十五夜の歌の遊びからうまれたとすれば、つぎには話の伝播者について触れておかねばならない。これらの話が、座頭によつて語られた時代があると、私は考えている。¹⁵⁾ 早くに柳田國男は、狂歌咄の作者は座頭であると指摘している。彼は「餅と座頭の交渉」から、「餅の日」が座頭の来る日、「餅を食うべき宵」が、彼らのおどけ話を聞く機会であった、と推定した。この魅力的な想定は、まだ検証を要するが、見当は外していないと思う。「餅連歌」や「芋盗み」の話が、本来、「餅の日」の話であることは、見てきたとおりである。八月十五夜、餅(里芋)が月に供えられ、宴の座では詩歌の遊びに興じられた。その折の「当座の俳諧」として、連歌や狂歌に遊んだ。その宴の座につらなつて、座頭は彼らの話の芸を披露したのである。室町期の『言経卿記』(永禄元年八月十五日)の一条は、芋名月の記録である。

一、座頭福仁来了、(中略) 則西御方ヘツレテ罷回、内々承二依テ也、種々藝也、上ルリ・平家・小哥・シヤヒゼン・

早物語、其外逸興、共有之、

一、下冷泉被來了、夕漁相伴了、次名月之間、当座十五首
有之、

名月の夜であれば、歌や芸能に時をすゞす。座頭は、宴の座を
にぎやかす芸能の徒であった。このとき平家や早物語を語つたよ
うに、後世、彼らはつぎのよう早物語も演じた。芋名月にふさ
わしい「芋淨瑠璃」（大分県直入郡直入町に伝わる早物語）である。^[16]
この一曲は、「ころはホーロク元年、旬は弥生の半ばすぎ」に蜂
起した、芋の謀叛が語られる。しかし、悲しいかな、すでに悲運
は待ちつけていて、天命によつて征伐の軍が送られる。

ヤアヤアー、イモ共よっく聞け。汝主命に背き謀叛の旗上

げなしたるが、百姓道具にさる者ありと聞えたる、鍬刃の
太郎、鎌刃の次郎ハセ向うたり。覺悟をヒロゲとポックリ
掘りかえし、チヨツキチヨツキと首打ち落す。親イモ子イ
モチリヂリバラバラ、荒目のショウウケに拾いこみ、川端さ
して運ばれる。上を下へとマゼかえし、アカギレ足にや踏
んむかれ丸の裸となり果てた。荒むしろに拵げられ、南向
きにて日向ボッコは心地よし。心地良かりしも束の間で俎
板太郎、薄刃の少将現われ、五形さんざんに切りキザミ
鍋田地獄にや落される。（中略）奥歯の太郎、前歯の次郎、
舌の三郎に相渡せば、情け容赦もあらばこそ、無茶苦茶に
かみつぶされ、「おのれこのうらみおば生れかわり死にか
わり、何時の世にかハラさん。」と無念や無念の歯がみと

共に、咽喉のセマタを打通り、腹村さして落ちにけり。は
や裏門となりければ山伏姿に身をやつし、菊の御門を押し
開き、ブウ／＼と吹きたてて、元の畠に立ち帰る。

擬物語よろしく、切り刻まれて食べられて、元の畠の肥料と
なるまでの、里芋の運命が、おもしろおかしく語られる。座頭
はこういう滑稽芸を語り伝えてきたのである。おそらくは、月
に供えた芋を題材とした即興芸にちがいない。供え物が「餅」
であれば、「餅合戦」が語られたのではないか。目前の「餅」や「芋」
に即して語ること、それが彼らの即興芸である。

ここに「里芋因果」という昔話がある。栃木県芳賀郡茂木町
で語られたもの。これも右の早物語と発想を同じくする。

里芋つちやあれは、里芋にいわッせと、おれほど因果なも
のはねえつていうんだなれ。で、畑にいるうちはかんぶ
り（頭）振り振り育でられて、鍬とか万能とがのいうので
掘り起こされて、親と小芋つて、あれ親芋小芋ね、あれを
きれいに引きはなさつちやつて、いよいよ最後には桶のな
がへ入れで、ゴリンタリゴリンタリン、桶のかずまでこし
らえで、ゴリッコリゴリッコリやられでね。あれをしられ
ちゃつて、そうしてまず最後には鍋のながへ入れられで、
上がらは蓋を押しされちやつてな、下がらは火をたがれん
だ。これほどひでえことはねえつんだな。最後にやま
だ器のながへ入れられでな、お箸のやつけになつて、奥
歯でかみしめられで、これほど因果なものは世の中にあん

めえって、芋の一口話の世迷い言だつちのは、これはまず
聞いてんね。

これは因果な「芋の一生」の物語であり、座頭の早物語と変わ
りはない。畑で掘り起こされる里芋（親芋・小芋）の運命は、そ
のまま狂歌咄「芋盗み」にかさなる。安間清はこのような「イモ
一生の物語り」を集めて紹介しているが、いずれも座頭の早物語
である。⁽¹⁸⁾彼らはこのような滑稽芸を持つて歩いて、「餅の日」、芋
名月の夜には、招かれて語つていたのである。これと同じく「餅
連歌」や「芋盗み」の話も、言葉たくみな彼らの話の芸である。

（九）座頭の祝福芸

座頭は「餅の歌」を得意とした。『乳母の草紙』では、意地
の悪い乳母が、もとの亭主の座頭に教わった歌を、琵琶を片手
に歌つてみせる。

大空にはかかるほどの餅もがな生けよふ一期かぶり喰はん
この歌、『醒睡笑』（児の嘲・巻の六）にも見えている。『乳
母の草紙』の一条は、作り話であるにしても、座頭が「餅」の
狂歌を得意としたことを伝えている。柳田國男は、こういう餅
話から「餅と座頭の交渉」を考え及んだのである。彼らは歌・
連歌の席につらなつて、餅の狂歌を詠んでは、一座の笑いを誘つ
たのである。つぎのも座頭の機知を伝える話である『醒睡笑』
姫心・巻五)。

大名の扶持を受くる座頭あり。茶を挽かせられしが、飲み
て見給へばあらし。おほきに機嫌そこねしに、
粗くともあが科のをと思すなよ茶臼に目なし碾手にもなし
このことわりにて事すみぬ。

「あが科のを」には、茶の産地「梅尾」が掛けられている。お
のが盲目の境涯を、笑いのタネとするのは座頭の常套でもある。
「目が見えぬから、茶の挽きようの荒いのは勘弁してください」と、
へりくだつて、大名の機嫌をとる。おどけ話とはいえ、これも歌
徳説話の体裁をとる。座頭は、おのが歌の才、即興の機知を、こ
ういう形で誇つたのである。何やら悲しい笑いであるが。

座頭が機転の才を誇るのは、おそらく彼らの祝言の芸と結び
ついているのだろう。鈴木牧之『北越雪譜』（初編・巻之上「雪
に座頭を降す」）が記録する一話が、それを示している。雪に
降り込められて、春を迎える年越しの夜、ある人の家で、鬼の
話題をはじめとして、さまざまな雑談に時を過ごしていると、
明かり窓から、がらがらと崩れ落ちてきた雪とともに、小座頭
の福一が降ってきた。すわ、鬼か、と驚いた一座の人は、めで
たき年越しの夜に人騒がせな、早く立ち去れ、と福一を責める。
そこで福一は歌一首を詠んで、一座の機嫌をとる。

福一かしらをたれ、もののを接するさまなりしが、やがて
兎角にむかひ、「歌一首詠み候。書きてたまはれ」といふ。
此の福一は、としわかけれど、俳諧もざれうたをも詠むも
のなれば、あるじ、「こはおもしろし」とて、兎角が書き

たるをよませて聞けば、

吉方から福一といふこめくらが入りてしり餅つくはめで

たし

この歌にて人々めでたし／＼と興じ、手を打ちていさみよ
ろこび、ふたたび盃をめぐらしけり。

年越しのめでたき「餅の日」に、失態を演じて咎められた小
座頭が、歌一首で、一座のご機嫌をとり結ぶ。こうして歌の手
柄と祝言のわざが、たたえられる。機転を利かした歌が、彼ら
の芸なのである。「小盲一米倉一尻餅一餅つき」、こんな言葉遊
びの技でもって、祝言としたのである。宴の座にあって、「餅」
や「芋」をタネとして、祝言の「ことほぎ」をして歩いたので
ある。歌は彼らの祝言のわざであった。「餅連歌」や「芋盗み」
の昔話は、彼らの話の芸を今に伝えて、たいそう興味ぶかい。

(注)

- (1) 拙稿「咄・雑談論の輪郭」(『咄・雑談の伝承世界』所収)
三弥井書店 平成八年
- (2) 立石憲利・前田東雄編(『日本の昔話9』所収) 日本放送
出版協会 昭和四十九年
- (3) 笠井典子編(『日本の昔話6』所収) 日本放送出版協会
昭和四十八年
- (4) 坪井(郷田)洋文「年中行事の地域性と社会」『日本民
俗学大系』第十三卷 平凡社 昭和三十五年
- (5) 佐々木徳夫編(『昔話研究資料叢書』第十五卷) 三弥井書
- (6) 稲田浩二編 店 昭和五十四年
- (7) 伊那民俗研究会編・信濃郷土出版社 昭和九年
花部英雄「西行と芋盗み」(『西行伝承の世界』所収) 岩
田書院 平成八年
- (8) 花部英雄「西行と芋盗み」(『西行伝承の世界』所収) 岩
田書院 平成八年
- (9) 徳江元正「鳥帽子桜一『花盗人』の背景」(『能楽タイムス』
三十八号 昭和五十九年七月)
- (10) 志田延義「天正狂言本歌謡雑考」(『続日本歌謡図史』所収)
- (11) 乾裕幸「八古俳諧と狂歌▽序説」(『俳句の本質』所収) 関
西大学出版部 平成十四年
- (12) 西澤美仁「西行伝承資料集成稿1」 基盤研究(C)(1)
研究成果報告書『西行伝説の説話・伝承学的研究』平成
西大学出版部 平成十四年
- (13) 武田明「巡礼と遍路」所収。前掲花部論文(8)参照
- (14) 福田晃・宮岡薰・宮岡洋子編「伯耆の昔話」(『日本の昔
話15』所収) 日本放送出版協会 昭和五十一年
- (15) 柳田國男「米倉法師」(桃太郎の誕生)所収『定本柳田國男集』
八巻
- (16) 安間清「早物語覚え書」所収 甲陽書房 昭和三十九年
- (17) 小堀修一・谷本尚史編「下野の昔話」(『日本の昔話22』所収)
日本放送出版協会 昭和五十三年
- (18) 安間清「早物語覚え書」
- (こばやし・ゆきお/東海学園大学)